

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その7

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、シンジがこれまで経験してきた相次ぐ喪失を受け入れられず、もがき苦しむ中、より事態を悪化させてしまう。

シンジはその事態に直面し、強い絶望、取り返しのつかない様な罪悪感の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そしてこの心性が思春期の人々の心の揺れ動き、喪失感それと同時に希望と再

生という点で非常に似通っているものを感じる

喪失という観点でボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

Q の結末において、シンジは、取り返しのつかないほどの罪悪感に苛まれなが

らも、無気力な状態に陥った。外見上は状況が非常に悪化しているように見える

が、心の内では、ボウルビィの喪失過程における「断念と絶望の段階」に進ん

でいるように思われる。Q では、「無感覚・情緒的危機の段階」と「思慕と探求・

怒りと否認の段階」を繰り返していたが、最後にロンギヌスの槍を抜いて世界が変わりゆく様を目の当たりにし、シンジは現実を受け入れる。しかし、その重大さに絶望し、取り返しのつかないことを深く後悔し、苦しみがきついていたと考えられる。

そこでシンジの心の成熟を進めていく（③→④の移行 または抑うつポジションへの移行）には、シンジ自身を受け止め、抱える環境が必要不可欠である。

2. シンジが目覚めた時、周囲の状況はどのような反応であったか？

（Qと同じテーマ）

絶望に打ちのめされていたシンジは、保護された第三村の人々に温かく迎えられる（トウジの家で皆が食事を食べたり、お酒を飲んだりして和気藹々としていた）。皆（トウジ ケンスケ達）が殻に閉じこもっていたシンジに対して寄り添い、受け止め、心配している様を感じられた。（この点がQでの周りの人々の様子と非常に対照的である。）

しかしシンジの様子は変わらず、一言も話すことなく、部屋の片隅で一人離れた状態で両膝を抱え込んだままうずくまっていた。けれども第三村での温かい人間関係が、絶望の淵に立たされていたシンジに、新たな希望の光を灯した。周囲の人々の温かい共感とサポートは、彼の心を癒し、ボウルビィの喪失過程における④離脱・再建の段階へと導く、大きな力となった。

3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変ったか？

シンジの心は育まれていると感じられることを象徴しているのが、綾波と市井の人々との関わりである。「違って、いいの？」「私、命令がないのに生きてる。なぜ？」「名前、付けていいの？」とつぶやいた様に、綾波は周囲達との和気藹々とした関わりの中で自分が誰かの指示で動いているのではなく、自らが人と交流し、その温もりを感じ、自分という主体性を持つことに大切さ、そして個を持つこと、その喜びを感じ始めている様にこのシーンは描いている様に感じられ

る。

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

1) まず、綾波とシンジの対話

3の様に主体性を形成していった綾波がシンジが関わることで、シンジの心が大きく変わっていく。綾波とシンジの対話の中で

「守ってなんかいない。何もかも僕が壊したんだ。もう何もしたくない。話もしたくないんだ。もう誰も来ないでよ！ 僕なんか、放っておいてほしいのに！なんでみんな、こんなに優しいんだよ」

という言葉が印象的である。この言葉の裏には「自分はこんな重大な罪を犯してしまった。そんな自分でも本当にここで生きる価値はあるのか？みんなのやさしは偽りではないのか？」と綾波に深く問いただしている様に感じられる。

そこで、これまで命令でだけしか動けない綾波が「碇君が好きだから」淡々といった言葉は、シンジの存在証明を強く明示している様に感じられ、シンジの心を深く揺さぶった様に感じられる。

→シンジは心を閉ざすことをやめ、トウジやケンスケが暮らす生活に入り込んでいった。それはシンジが現実世界を受け入れはじめていく。

3) 綾波の喪失

段々第三村の生活に馴染んでいったシンジだが、そののどかな生活は長くは続かなかった。

綾波：おはよう

シンジ：おはよう。どうしたの、こんな朝早く

綾波：碓君に会いたかった

シンジ：これ

黒い音楽プレイヤーをシンジに差し出した。

シンジ：あ、ありがとう

シンジ：あの、頼まれていた名前なんだけど——綾波は綾波だ。他に思いつかない

綾波：ありがとう。名前、考えてくれて。それだけで嬉しい。ここじゃ生きられない。けど、ここが好き

シンジ：綾波？

綾波：好きって分かった。うれしい

シンジ：綾波、どうしたの？

綾波：稲刈り、やってみたかった

綾波：ツバメ、もっと抱っこしたかった

綾波：好きな人と、ずっと一緒にいたかった

綾波：さよなら

シンジ：綾波！

別れの言葉の直後、レイは息を引き取るように瞳を閉じ、綾波は爆発し、そこには LCL に濡れたプラグスーツのみがあり、シンジはそのプラグスーツを抱い

て静かに泣き出す。

【考察】

綾波が力尽きるシーンは、その残酷さゆえに胸を締め付けられる。しかし同時に、これは母子分離、そしてシンジが数々の喪失を受け入れる決意を固めた象徴的な瞬間とも捉えられる。綾波が音楽プレイヤーを手渡す行為は、彼女自身の分身、あるいはシンジへの託宣（たくせん）のように思われる。それは、シンジが綾波から独立し、現実世界へと歩み出すための、切ない移行対象なのではないだろうか。

綾波の「ここじゃ生きられない」という言葉は、第三村の生活がいかに安寧であっても、彼女にとってそれは一時的な避難場所であり、本来の居場所ではないことを意味している。これは、シンジの宿命とも重なる。第三村はシンジにとっても仮の安息の地であり、彼はいずれヴンダーに戻り、エヴァに乗り込み、父との対決へと向かわなければならない。つまり、エディプスコンプレックスという宿命的な課題と真正面から向き合うことが、シンジの成長にとって不可欠なのだと考えられる。

そしてシンジ自身はエディプス葛藤に対峙するために再びエヴァに乗る決意を固める。

5. ヴンダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様変わったのか？

シンジはアスカに気絶させられ、目覚めたときはQでシンジが目覚めたときの様に担当医務官の鈴原サクラが彼の様子を覗き込んだ。その後、「勝手に出て行って、あんだけ乗らんといてゆうとったエヴァに乗りくさって、アホ！ アホ！ 碓さんのドアホ！」という様に、一方的にまくし立てる言いながら、途中感極まり、シンジの胸にすがって泣き伏す。その様子は、Qの様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違っており、アスカに「女房か、あんたは」と呆れて言われた様に、サクラはシンジに対して愛憎まみえる心情を抱いていた様に感じられる。

このサクラのシンジへの関わりが象徴的だが、ヴンダーの乗組員はミドリのようにあからさまに彼に対して憎しみを抱いている人もいる一方である程度シンジの存在を受け入れつつある様に見える。

そのやりとりをいくつかとりあげてみる。

2) 母の様な存在、それはミサトを初めとしたヴンダーの人々がシンジの心を受け止めていくことが必要不可欠と考えられる。

そこでリツコとミサトのやりとりを取り上げる。

リツコ「――で、葛城艦長。仮称、碇シンジ君は、どうするの？ 息子と同じく、一生会わない気？」

ミサト「艦内保護で十分。私が面会する必要はないわ」

リツコ「D S S チョーカー、未装着のままでもいいのね？」

ミサト「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」

リツコ「ミサト、そうして格好つけてても、本心では戻ってきてくれたって喜ん

でるでしょ」

【考察】

ここで、ミサトはシンジに対してツレない対応をとっている。しかしこのやりとりを Q のリツコの発言と対比していくと興味深い。

リツコは DSS チョーカーに関して「私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です。」と言っているが、ここでは不信・罰の象徴の DSS チョーカーを未装着のままの状況をリツコもミサトも受け入れている。それだけ二人ともシンジを受け入れようとする心性に変わっている。そしてミサトの「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」という言葉は、何か突き放した言い方ではあるが、Q のときと違い、

（「エヴァに乗る必要はありません」と主体性を剥ぎ取る様な発言をしていた。）

シンジを信頼しており、彼が妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行という心の成熟を陰ながら見守ろうという思いに他ならない。だからこそ最後のリツコの言葉が生きてくるのだと思う。

3) アスカとシンジとのやりとりの変遷について考える

シンジが覚醒後、初めてアスカに対面したシーンから考察を始める。このシーンでシンジは、もぬけの殻のような状態で、食事も摂らず、ほとんど動けず、終日横になっている。この状況は、うつ病の極期そのものである。何もせず横たわるシンジに対し、アスカは強い怒りを感じている。

アスカはシンジのこのような状態を受け入れられない。さらに、シンジのパッシブアグレッシブ（受動的攻撃行動）に巻き込まれ、彼に対する怒りを直接的にぶつけている。

（受動的攻撃的コミュニケーションの根底には、直接的な衝突に対する恐怖心・回避したい気持ち、無力感、不安がある）

この状況により、シンジとアスカの関係はサド・マゾ的、支配・被支配の関係

となっている。これは心理学的に見れば、肛門期的関係である。アスカは、全く食事を摂ろうとしないシンジ（現実を受け入れられない象徴でもある）に業を煮やし、強引にレーションを彼の口に押し込もうとする。これに対しシンジは、ケンスケの家を飛び出す。この行動は、歪んだ関係が続き、アスカと対等な関係になれないと感じた結果、咄嗟に起こした反応である。

アスカの「どうせやることなすこと裏目に出て、取り返しがつかなくなって、全部自分のせいだから、もう何もしたくなかったでしょ」という言葉は決定的である。これは、アスカ自身がシンジの気持ちを理解しているものの、その感情を受け止めきれないという明確な表明である。

結論として、この時点でのアスカとシンジの関係性は、互いに未熟なものである。

次に、ヴンダーにアスカが搭乗し、マリとの再会のシーンを取り上げる。

マリ「By the way, ワンコ君との進捗どうだったん？」

アスカ「べつに、興味ない」

マリ「ほう。年頃の男の子は眼中にないと」

携帯ゲームをしながら、アスカは突き放すように言う。

アスカ「ガキに必要なのは恋人じゃない。母親よ」

これまで、この番組でシンジが現実を受け止め、心の成熟を進め生きていくには、彼の心を受け止めていく母親の様な存在が必要であるということを何度か述べてきたが、マリにアスカが「ガキに必要なのは恋人じゃない。母親よ」と言ったことはそのことを話している様に感じられる。

そしてマリの問いにアスカは戸惑い、強がっているが、自分はシンジの心を母親の様にきちんと受け止められず、うまく関われなかった後悔の様にも感じられる。

そしてそこが、3)の戦闘配備前にアスカがシンジに会いに行くシーンにつながってくるものと考えられる。

3) 戦闘配置のためにアスカとマリがエヴァに乗り込む前にシンジに会いに行ったシーン

アスカはシンジに会いに行く前にマリとの会話で「ここは無垢の下ろし立てでしょ。死に装束だもの」と話していた様に戦闘で亡くなるかもしれないと思い、シンジに会ったのだと考えられる。それは最後に大切な人に会っておきたい、そして心残りであった自分の思いをきちんと共有したいという思いもあった様に感じられる。

アスカ「最後だから聞いておく。私があんたを殴ろうとした訳、分かった？」

シンジ「アスカが、3号機に乗っていた時、僕が何も決めなかったから。助けることも、殺すことも。自分で責任、負いたくなかったから」

アスカ「ちっとは成長したってわけね」

アスカ「最後だから言っておく。いつか食べたあんたの弁当、おいしかった。あのころはシンジのこと好きだったんだと思う。でも、私が先に大人になっちゃった。じゃ」

このシーンではシンジの心の成熟が認められる。自身がその時なぜそうしてしまったのか？そしてその行動によってアスカを如何に傷つけてしまったのか？ということを理解している。それはシンジが抑うつポジションになり、現実を受け入れてきたからこそ発せられる言葉だと感じられる。

そしてアスカも成熟している様に感じる。最後のアスカの言葉で「大人になっちゃった。」という言葉は、シンジ・綾波（もういなくなってしまったが）との強い結びつきからの断念（「シンジのこと好きだった」と過去形で言っている）であり、それはエディプス葛藤を受け入れ（断念）、新たな道へ進もうとするアスカの心性が描かれている様に感じられる。そしてアスカのこの言葉はシンジへの別れの言葉でもあるが、なにか今までの強がっていたアスカとは異なり、寂寥（せきりょう）の念が感じられる。

だからこそ、その後、マリはシンジに対して

マリ「よっ。君はよくやってる。偉いよ。碇シンジ君」

と言い、

アスカには

マリ「姫、ちっとはすっきりした？」と言い

アスカ「そうね。すっきりした」と返した様に見える。

Thrice Upon a Time シンエヴァのサブタイトル

シンエヴァンゲリオン 劇場版のサブタイトルであるが、何度も時間が経過したことを示唆し、この表現は、時間の経過や物語の進展を強調する際に使用される。

「未来からのホットライン」という映画、反復強迫

→シンジを含め周囲の人々が抑うつポジションになり、反復強迫から抜け出し、

新しい世界を切り拓いてく心性を表しているようにも感じられる。

(thrice (三度) というのがエディプス葛藤を彷彿とさせる)

ここヴンダーの乗組員はシンジ、アスカ、ミサトをはじめ、多くの人たちの心の成熟（抑うつポジションへの移行）が起きている様に感じられる。

そして父と対峙し、倒し乗り越える様ためにヴンダーの乗組員はネルフ本部にヤマト作戦を行い、総攻撃をしかける。

6. シンジとヴンダーとの葛藤

ヴンダーはヤマト作戦を行い、総攻撃を仕掛けるが、作戦はうまくいかず、アスカは式波のオリジナルによって13号機に連れ去られてしまう。そしてヴンダーも制御システムを乗っ取られてしまう。そこにネブカドネザルの鍵を使い、人間を捨てたゲンドウがヴンダーの前に訪れ、ヴンダーの主機であった初号機を奪い、第13号機に乗り込みさらに深層の「マイナス宇宙」へと向かってゆく。それを見たシンジはエヴァに乗ってゲンドウを追うことをミサトに願い出る。